

埼玉県知事賞

深谷市立花園中学校 三年 増山 皇誠

母の机の向こう側

夕食後、母が持ち帰った分厚い書類の束を机の上に広げていた。

「これ、何？」と覗き込むと、漢字や数字がびっしりと並んでいる。

「確定申告の参考資料。」

母は税理士事務所で働いている。子どもの頃の私は、「税金」という言葉を聞くと、お菓子の値札についている消費税のことぐらいしか思い浮かばなかった。しかし、母の机の上にある書類、もっと複雑で重たいもののように見えた。

ある日、母は仕事帰りに少し疲れた顔で帰宅した。

「どうしたの？」と聞くと、

「お客さんが、今年は思ったより税金が多くて厳しいってさ。数字だけでなく生活の話も出るから、正直こっちもきつい。」

その言葉が妙に心に残った。税金は単なるお金のやりとりではなく、人の暮らしと直結しているのだと感じた瞬間だった。

冬休み、母の事務所にお邪魔する機会があった。整然と並んだファイル、壁の棚にぎっしりと詰まった帳簿、そして静かに電卓を叩く音。母はお客さんと電話で何か話していた。

「はい、今年の納税額は〇〇円です。また…」その声は、落ちついていながらもどこか温かかった。税金の数字を扱いながら、その裏にいる人を思っているのが伝わった。

帰り道に母に、「どうしてそんなに丁寧に説明するの？」と聞いてみた。

「税金は義務だけど、仕組みを知らないと不安になるでしょ。数字を通して安心してもらうのも仕事の内なの。」

母の言葉は、私の中で「税金＝取られるもの」という単純なイメージを変えた。税金は人と人をつなぐ説明や信頼の時間も含んでいるのだ。

その後、学校の授業で税の使い道を学んだとき、私は自然と母の言葉を思い出した。授業では道路、消防、教育、福祉などを教えられたけれど、私には「母の声」もそこに加わっているように思えた。税金は無機質な数字ではなく、その向こうに生活があり、喜びや悩みがある。母はその橋渡し役をしているのだ。

もし将来、私が何かの形で社会に関わる仕事をするとしたら、母のように数字だけでなく人の思いも受け止められる人でありたい。税金という仕組みの中に、人間味を見つけられる視点は、きっとどんな職業にも生きるはずだ。

母の机の向こう側を知ったあの日から、私はそう思っている。